

第 90 回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

こんなアイデアも

自閉症スペクトラムのある子どもの場合、「きれいにしましょう」と伝えられても、理解できないことがあります。それは、「きれいに」という抽象的な言葉の理解が苦手であることが多いからです。理解できないことばで伝えられても、どのようにしてよいのか分からなくなってしまうために、混乱することになるでしょう。このようなときには、伝える側が、具体的にわかりやすく伝えるための工夫をする必要があります。

「机をきれいにしましょう」ではなく、「机を 5 回拭きましょう」というように伝えるようにするなどです。5 回という回数がわからないのであれば、ジグなど用いて 5 回拭くようにすることなどが考えられます。ジグというのは、理解を助けるための道具のことです。例えば、一回拭くごとに磁石を移動させて 5 回拭いたことを確認するというものなどが考えられます。数を数えることができなくても一対一の対応ができるのであれば、このようなジグも使うことができるはず

です。また、手順表の活用も一人でできることを増やすための工夫です。作業などにはそれぞれ手順があるので、それを順番に並べて文字やシンボルなどで示し、伝えるようにするのです。それを見ながら作業すればできるようになる人も多くなると考えられます。

役割意識を育てるための方法について考えてきました。役割を果たすことで自己肯定感が育てるのです。自分が必要とされているという気持ちを小さい時から育てていくことが重要です。そのために大切なことは、活動をその子どもにわかるように伝えることと、その子どもが自分の力でできるように手立てを工夫することです。私たち指導者は、子どもたちに、過不足のない必要な支援をしたいものです。そして「〇〇さんありがとう」と言えるようにすることが、その子どもの役割意識を育てるうえで最も重要なことなのです。

役割意識の大切さについては述べてきたとおりなのですが、役割意識が育つだけで働けるようになるのでしょうか。自分のことに置き換えて考えてみると答えは「ノー」でしょう。役割意識だけで働くことはできないということです。そこには何がしかの報酬が必要です。報酬がなくてもできることは、せいぜい家や学校でするお手伝いくらいでしょう。

自閉症スペクトラムのある人たちの場合、効果的に力を付けていくためには、実体験ができるように工夫することが重要です。そのためには、何らかの形で報酬を得る体験ができるようにすることが、働く意欲を育てる最も効果的な方法なのです。何とかお金を捻出して、報酬を意識できるように学習が展開できればよいのですが、現在の学校教育のなかでは、それは容易ではありません。このような現実があるなかで、どのような方法が考えられるのでしょうか。学校でできること、家庭と協力してできることを考えていきたいと思います。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013 年より教授に就任。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラスルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための 10 のアイデア (エンパワメント研究所) など